

風姿花伝第一、年来稽古条々

五十有余

この頃よりは、大方、不^せ為^ぬ
ならでは、手立^だてあるまじ。

麒麟^{きりん}も老ては土馬^{どば}に劣^をると

申^{まう}事^{こと}あり。さりながら、

真^{まこと}に得たらん能者^{のうしや}ならば、

物数^{ものかず}は皆々^{みなく}失^うせて、善悪見^み

所^{どころ}は少^{すく}なしとも、花は残^{のこ}る

〔口訳〕

此の頃からは、先づ大体、「せぬ」といふ方針をとる以外に手段もないやうである。諺に「麒麟も老ては驚馬に劣る」といふ語があるが、正に其通りだ。しかし、真に得法した名人ならば、今まで花をさかせた曲は皆演じ難くなり、善いにつけ悪いにつけ、見どころは少くなつてしまつても、花といふ妙趣だけは残るものである。我が亡父は、五十二歳の五月十九日に死去せられたが、その月の四日に、駿河国浅間神社の御前で法楽能を演じ、しかもその日の猿楽は殊に花やかで、見物人

べし。忘父^{ぼうふ}にて候^者し物は、

五十二と申し^{まうし}五月十九日に

死去せしが、その月の四日

の日、駿河^{するが}の国浅間^{せんげむ}の御前

にて、法樂仕^{つかまつり}、その日の

猿樂^{ざるがく}、殊に花やかにて、見

物の上下、一同に褒美^{ほうび}せし

なり。凡其^その頃、物数^{かず}をば、

早今^{はや}の初心に譲^{ゆづ}りて、安き

所を少な^{すく}少^{すく}なと、色^{いろ}ひて為^せ

しかども、花は弥増^{いやま}しに見

えし也。これ真^{まこと}に得たりし

花なるが故^{ゆえ}に、能も枝葉も

少^{すく}なく老木になるまで、花

上下こぞつて賞讃したことであつた。その頃は、花を咲かせるやうな能はもうすべて初心の者にゆづり、自身は安い所を色香も控へ目控へ目にと演ぜられたのだが、その美事さは又一段と立派なものであつた。これは、真に悟得せられた花であつたから、能は枝葉も少くなり老木になるまでも、花は散らないで残つたのである。これ事実老骨に花が残つた証拠である。

は散^ちらで残^{のこり}しなり。これ、
目^{まの}前^{あたり}、老骨^{こつ}に残^{のこ}りし花の証
拠なり。

年来稽古、以上

〔評〕 五十有余といった所を、最後のものとしたのは、観阿弥を標準としていつたものであらう。勿論五十余で引退するといふのは、今日の考か

らでは早きに過ぎる。これは室町初期、能楽の草創期を以て考へてやらねばならない。しかし、実際に、世阿弥の晩年時代には、芸の進歩と、鑑賞眼の進歩とで、六十歳以上の芸を賞翫するところまで行つて居り、音阿弥などは、特に老後の芸能のすぐれてゐることを以て賞せられて居る（蔭涼軒日録に詳しい）。これは、年齢の制限を、芸の力で克服したものであつて、七十歳位までは益々光つてゆくといふのが、名人の持味であると思ふ。